

平城京左京三条一坊一坪の発掘調査（平城第 491 次調査）現地説明会資料

2012 年 6 月 23 日

独立行政法人 国立文化財機構

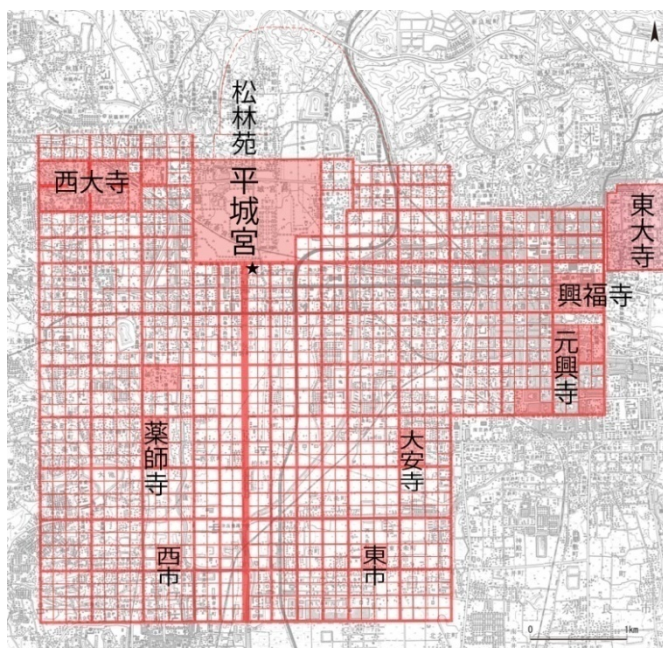
奈良文化財研究所 都城発掘調査部

1. 平城京左京三条一坊一坪に関するこれまでの調査

本調査の調査地は、平城京左京^{へいじょうきやう}三条一坊一坪^{さんじょういちぱういちへい}にあたります。平城宮^{へいじょうきやう}の正門である朱雀門^{すざくもん}のすぐ南東に位置し、現在は史跡平城京朱雀大路跡^{すざくおおじ}に隣接する緑地公園の一部となっています。奈良市教育委員会や奈良文化財研究所による周辺の調査成果によれば、この坪は朱雀大路に面する西側と二条大路に面する北側には築地塀^{ついでい}などがなく、朱雀門前の広場のような土地であった可能性が高いとされてきました。また奈良市教育委員会の調査により、坪をふたつに分ける東西方向の坪内道路^{つばないどうろ}が見つかりました。

この場所に国土交通省による平城宮跡展示館（仮称）を建設する計画があり、2010 年度から奈良文化財研究所が発掘調査をおこなっています（平城第 478・486・488 次調査）。第 478 次調査では、上段が正方形で下段が六角形の大きな井戸が見つかり、その中からは木簡や木製品・金属製品・土器・瓦など、さまざまな遺物^{いぶつ}が出てきました。第 486 次調査では、平城宮の造営に伴うとみられる鉄鍛冶工房群^{かじ}が広がることを確認しました。第 488 次調査では、坪内道路を再確認し、またそれよりも古い建物群が見つかりました。そのうち 3 棟は、さらに南へ伸びる可能性があると言われていました。

本調査は、第 488 次調査で見つかった建物群の規模や配置、坪全体をどのように利用して



調査地位置図（★印が調査地）

いたかなどを明らかにすることを目的としています。調査面積は 1872 m²（東西 48m×南北 39m）で、4 月 2 日に開始し、現在も継続中です。

2. 主な遺構

本調査区内では、地面を平らにするために広く整地^{せいち}をほどこしています。後世に削られて整地土の下^{じやま}の地山^{じやま}が出ている部分もあり、遺構^{いこう}はすべて、この整地土の上または地山面の上で見つかりました。

主な遺構は、掘立柱建物^{ほったてばしら}4 棟（建

物1・2・4・6)、土坑^{どこう}1基、溝3条などです。なお、建物には第488次調査からの通し番号をふっており、本調査区の外にある建物3・5については説明を省略します。

建物1 桁行^{けたゆき}10間、梁行^{はりゆき}2間の南北棟の掘立柱建物で、東面の南6間分に廂^{ひきし}がつきます。第488次調査で桁行8間分が見つかったいましたが、本調査でさらに南2間分が見つかり、桁行が10間であることがわかりました。2箇所^{ふたところ}に間仕切^{まじきり}があり、桁行方向を4間、2間、4間に分割しています。柱間^{はしらま}の寸法は桁行、梁行ともに約3m（10尺）等間、廂の出は約2.4m（8尺）です。

建物2 桁行6間、梁行3間の南北棟の掘立柱建物で、すべての柱筋に柱をもつ総柱^{そうばしら}建物です。第488次調査で桁行4間分が見つかったいましたが、本調査でさらに南2間分が見つかり、桁行が6間であることがわかりました。柱間の寸法は桁行が約3m（10尺）等間、梁行が約2.4m（8尺）等間です。

建物4 桁行6間、梁行1間の南北棟の掘立柱建物です。第488次調査で桁行4間分が見つかったいましたが、本調査でさらに南2間分が見つかり、桁行が6間であることがわかりました。柱間の寸法は桁行、梁行ともに約3m（10尺）等間です。南と北の柱筋がそれぞれ建物2の柱筋と揃えられています。

建物6 桁行4間、梁行2間の東西棟の掘立柱建物で、北面に廂がつきます。本調査であらたに見つかった建物です。柱間の寸法は桁行が約2.7m（9尺）等間、梁行が約2.4m（8尺）等間、廂の出は約2.4m（8尺）です。

土坑 東西約1.2m、南北約1.5mの隅丸^{すみまる}方形の土坑（＝穴）で、深さは約50cmあります。内部から瓦片^{かわらへん}がわずかに見つかりました。

東西溝1 東西方向に伸びる素掘^{すぼり}の溝で、最大幅は約1.2m、深さは約15cmあります。内部から奈良時代後半の軒丸瓦^{のきまるがわら}などが見つかりました。

東西溝2 東西方向に伸びる素掘の溝で、幅は約0.4～0.8m、深さは約7cmあります。

南北溝 南北方向に伸びる素掘の溝で、幅は約0.6～1.4m、深さは約10cmあります。内部から奈良時代半ば頃の軒丸瓦や奈良時代の土器などが見つかりました。

3. 主な遺物

本調査で見つかった主な遺物は、奈良時代の土器・陶硯^{とうげん}・軒瓦です。その他に埴輪片^{はにわへん}や鉄滓^{てつさい}なども見つっています。



建物1の柱穴^{ちゅうけつ}（柱根^{ちゅうこん}やさまざまな部材が見つかりました）

4. まとめ

現時点での主な調査成果は、次のとおりです。

①建物1・2・4の規模を確認

建物1・2・4の南端を確認しました。3棟とも第488次調査区の南端からさらに南へ2間分つづき、桁行は建物1が10間、建物2・4が6間となりました。

この結果、特に建物1・2は平城京内としては大きな建物であることが明らかとなりました。建物1は桁行が約30mにもなる長大なもので、2箇所の間仕切で4間、2間、4間に分割されていることも特徴的です。また、総柱建物の建物2は高床^{たかゆか}の倉庫の可能性があり、その場合は床面積が約130㎡にもなる大きなものとなります。

②建物群の計画的な配置を確認

建物2・4の南端を確認した結果、2棟の建物が南北の両端で柱筋を揃えて建てられていることが明らかになりました。また、建物1の南の柱筋も建物2・4のそれとほぼ揃うことを、断割^{たちわり}調査により確認しました。これらからは、3棟の建物が同じ時期に、一連の計画のもとに建設された様子がうかがえます。

なお、建物1・2・4の南の柱筋は、左京三条一坊一坪の南の境界となる三条条間北小路^{さんじょうじょうかんきたこうじ}の北側溝^{そつこう}の中心より、約30m（100尺）の地点に位置しています。したがって、これら建物群の配置を決めるときに平城京の条坊の設定が基準となった可能性もあります。

本調査により、平城京左京三条一坊一坪では、坪内道路がつくられるよりも前の時期に、大きな建物群が計画的に建設されていたことが明らかになりました。また、その建物群が取り壊されたあとは広場のような様子であったことも確認しました。これらは、平城京内での土地の利用の仕方とその変遷や、左京三条一坊一坪がどのような土地であったか、などを考えるための貴重な成果です。なお、建物群が建設された時期や存続した期間などについては、

これからも調査・研究を継続していく予定です。



調査区と朱雀門（南東から）



調査区全景（北西から）

現地説明会のご案内を電子メールでお送りします。ご希望の方はお名前・ご住所・メールアドレスを下記のアドレスまでお送りください。

heijo@nabunken.go.jp

朱雀門

N



二条大路

朱雀大路

第180次

市336次

市342次

市119次

市143次

左京三条一坊一坪

第486次
調査区

第488次
調査区

今回の調査区
(第491次)

三条条間北小路

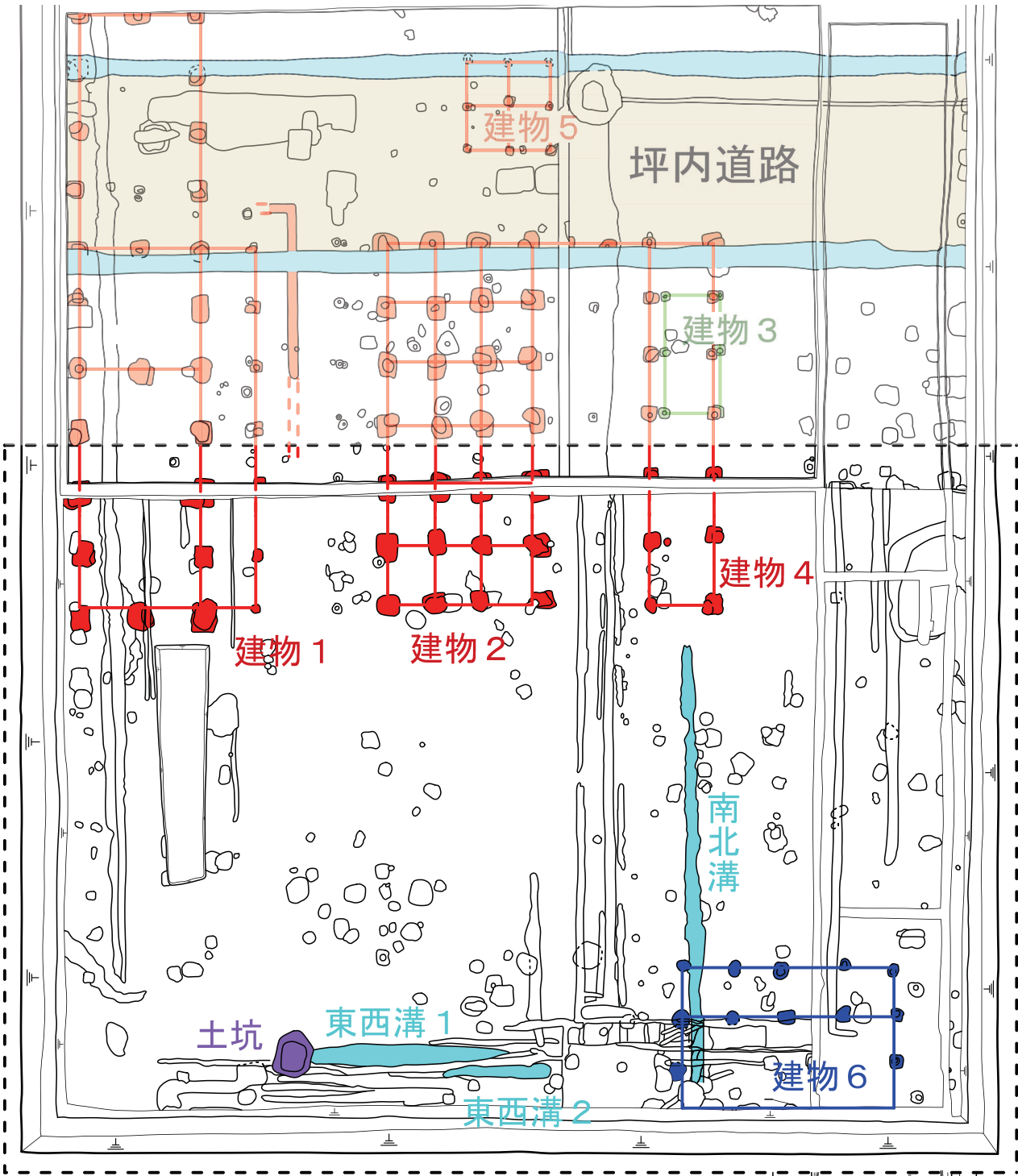
左京三条一坊二坪

第478次調査区

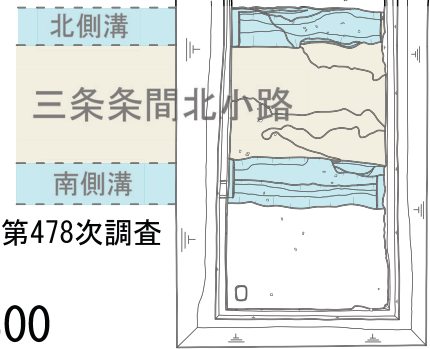
東一坊坊間西小路

0 20m

第491次調査位置図 1:800



第491次調査



第491次調査遺構図 1:300